

## ボリビアのパーフェクト・ストーム：新型コロナウイルス・パンデミック、経済危機、反動的クーデター政権

フェルナンド・モリーナ、リチャード・フィドラー著、脇浜義明訳

出典：The Bullet, 2020年8月12日

### 序論

Covid-19パンデミック感染者と死者の数が激増する南米大陸の中で、とりわけボリビアがその率が高い。8月8日現在で、感染者と確認されたボリビア人は10万人を超え、死者は3600人。ボリビアの人口はだいたい1千万人。

11月に政権に就いたクーデター政府のコロナ対策は最初から失敗であった。病院は人手と装備・器具不足、検査もほとんどせず、病原体の脅威を訴える人を「不正確な情報」を流したとして長期投獄で脅した。まともな雇用で働く人はごく僅かで、大部分は街頭の「インフォーマル」経済部門や零細自営業で辛うじて生計を立てている国、ボリビアである。しかも、ヘアニネ・アニェス大統領の暫定政府は、前政権時代に辺鄙な地域で医療活動を行い若い医師の要請を助けていた700人のキューバ人医療者を追い出したのだ。

さらに事態を悪くしたのは、暫定政権が経済危機を招いたことである。クーデター政府は前政府が着手していた国家開発プロジェクトを潰し、主要国営企業を民営化させ、IMFから3億2700万ドル借入れを行った。ボリビア人ジャーナリストのオリバー・バルナスは、アニェス政権の政策は「新型コロナウイルスがもたらす経済的影響を乗り切るボリビアの力を大きく破壊した。国民の38%が収入の道を完全に失い、52%が収入の一部を失った。国家の意図的な無策のため、コロナ禍外出禁止国民の90%が所得援助を受けなかった。唯一政府が行ったのは、ロックダウン中の4月末に一部の国民に対し70ドル相当の給付を一回限り行ったことだ」と書いている。外国へ経済的亡命したボリビア人は300万人いるが、その多くもコロナ禍で職を失ったので、彼らからの送金 — 多くのボリビア人世帯にとって重要な収入源 — はこの半年間で30%減少した。

「こういう絶望的状况の中で、国民は9月に予定されていた選挙でクーデター政府を終わらせることができることに期待をかけていた」とバルガス。「世論調査によれば、選挙が行われたら亡命したモラレスの政党MAS（社会主義運動）が最初の投票で勝利し、アニェスは大幅票差で辛うじて3番手になる予想であった。そうなるこの嵐に平和的に終止符が打たれると期待された。しかし、どうしても権力にしがみつきたいアニェス政権は、コロナ・パンデミックを口実に選挙日を延期した。公共交通機関を作動させ、国内のほとんどの経済活動を再開させていたにもかかわらず、選挙をやれば感染が拡大するとして、先送りしたのだ。」

新高等選挙裁判所（TSE）が法律で定められた9月6日全国選挙日を勝手に10月18日に延期すると決めたとき、国中で大衆的抗議運動が勃発した。ボリビア中央労働連合（COB）と統一協定（Pacto de Unidad）及びクーデターで追われた旧MAS政権を支持す

る種々の団体の連合体が仕掛けた抗議運動であった。8月3日から国内100か所で道路封鎖を行い、医療品を運搬する車両だけを通行させた。法が定める9月6日に選挙を行うことを要求して、数千人の人々が街頭へ繰り出した。

COB 指導者ファン・カルロス・ウアラチは「新しい政策、社会問題だけでなく経済問題のための政策を討議するために、民主主義的に選ばれた政府が必要だ…この8か月間わが国は崩壊状態だ。残念なことに、それが現実だ。IMF からローンを受けたために、IMF から国民や国家を脅迫する処方箋を押し付けられている」と言った。

この抗議運動に対しアニェス暫定政府は「テロ、虐殺、教唆扇動、公衆衛生を乱した」として MAS 指導者を犯罪者扱いした。TSE は MAS 候補者の立候補資格を剥奪せよという保守系の要求を支持し、そういう案件を最高裁に送致した。

次のコチャバンバ在住ジャーナリストのフェルナンド・モリーナの論文は、最近の抗議デモなどが起きる前に発表されたものだが、ボリビアの政治情勢、2019年11月の政変への MAS の対応、選挙に勝とうが負けようが MAS が直面しなければならない困難について論述したものである。私はこの論文をパブロ・エステファノーニが編集するブエノスアイレスの雑誌『ヌエバ・ソシエダード』（新社会）の2020年7~8月号から翻訳した。

— リチャード・フィドラー



COB mobilization marches through El Alto. [Photo by La Razón]

## ボリビアの危機 — 選挙と政治的再編

フェルナンド・モリーナ

新しい政治的シナリオの渦中でボリビアは大統領選挙・国会議員選挙へ向かっている。エボ・モラレスの亡命とそれによって彼の政治勢力は大打撃を受けたが、その後 MAS(社会主義運動)は力を回復、選挙では大勝利する可能性がある。本当に勝ち、再び政権を握れるであろうか。いずれにせよ、選挙は MAS とそれに反対する勢力との間の政治決戦となる。

現時点で9月6日投票と設定されている選挙は、大きな政治的・社会的両極化を表している。これはボリビア特有の現象ではなく、11月の米国大統領選挙でも見られる。ただ米国の場合は二大政党選挙システムなので当然の現象だが、ボリビアでは珍しい現象である。複数の政党が立候補者を立てるのであるが、選挙民は一つの選択肢を軸に二分されるであろう — MAS 支持か反対かという軸で。

反 MAS の国民を結集してその代表となるのはどの政党になるかは分からない。様々な中道・右派政党があるが、お互いに鎬を削るばかりで、まとまっていない。過半数と獲得する候補者がいない場合決選投票として第二ラウンドを認めるボリビアの選挙制度を当て込んで党利党略をめぐらせ、足の引っ張り合いをしている。反 MAS 知識人や評論家は、この足の引っ張り合いを、昨年11月にモラレス政権を転覆 — つまり21世紀初頭にボリビアを統治した社会主義ブロックを崩壊させた成果を台無しにするものだとして、怒っている。

ボリビアの経済的エリート、知識人エリート、メディア・エリートが一番案じているのはこのことである。旧来の反 MAS 諸勢力がお互いに譲歩し合って協力体制を作らないこと、事実上の首都ラパスのある日刊新聞が「公共の敵ナンバーワン」と呼んだ前大統領モラレスに敵対した諸勢力が競い合って、その結果ボリビアの支配階級にとって最も恐るべき亡霊 — MAS の復活 — を招くことを、一番心配しているのだ。

この心配に対して、中道・右派諸政党は、それぞれ自分こそが断固なる反 MAS 勢力で MAS に勝つ持続的力があるが、他党は MAS の水車に水を運ぶような行動をするので信頼できない、と応える。お互いがお互いを「MAS を助長させる働きをする」と非難しているわけだ。暫定政府大統領のアニェスを候補に立てているフントス・グループも同じで、2019年選挙でモラレスに敗れた元大統領のカルロス・メサや、反モラレスのデモを指導した保守派レイス・フェルナンド・コマチョなどの野党候補者を、同じやり方で非難している。この二人の方もコロナ・パンデミックに対するアニェス政府の対応を非難、対パンデミック失政によって MAS の復活を促進したと暫定政府を批判している。メディアも同じである。例えば、サンタ・クルスの主要日刊紙『エル・デベル』のカルロス・メサ候補者に関する記事のヘッドラインは、「メサはモラレスを亡命させているアルゼンチン大統領アルベルト・フェルナンデスと会議に同席」というものだった。

## MAS 憎悪

ボリビアの伝統的エリートの支配的感情は MAS 憎悪である。そのルーツになるのは様々に入り混じった不満の記憶（1990年代のテクノクラシー解体による権力空間の喪失や

14年間にわたる遺産によって譲渡される「家系資本」(genealogical capital)の切り下げ)、イデオロギーの相違(自由主義的共和主義対国家主義的独裁政権(caudillismo)、先住民と混血大衆に対するレイシズムである。

MAS 憎悪は、先住民大統領が誕生し、それとともに先住民、貧農、労働者を結びつける社会運動が政府の中に持ち込まれたことから生まれたのではなく、その前から存在していた。2002年、MAS が強力な勢力として登場した頃からすでにあった。モラレス政権が誕生してから最初の2年間の2006年~2008年、ボリビア北西部と南東部の間で内戦が起きそうな空気であった。これが起きなかったのはモラレスの人気が高かったからであろう。それもあるが、モラレス自身も国家改革プロジェクトの急進性をなるべく和らげ、農業資源の再分配プロジェクトも最低限にするなどの譲歩を行って、国民全体の統治の地固めをした。

そういう革新大統領の譲歩にもかかわらず、彼と左翼政府に対する憎悪は消えなかった。2009~2015年、ボリビアが史上稀な経済的好況 — 国民の多数の所得が増加、社会福祉が向上した — を経験したときですら、企業重役室、社交クラブ、保守派の事務所、サンタ・クルス・カーニバルの同好会、金持ち婦人たちのトランプゲーム会、その他伝統的エリートの優越性が残っている様々な場所では、反 MAS 憎悪が、秘密の祭壇の奉納蠟燭のようにくすぶり続けていた。たとえブルジョア層の有力者が MAS 政府に入ったり、MAS 政府と協力するふりをしたり、あるいは知識人やジャーナリストが MAS の力を恐れて「過剰に批判する」のを避けていても、潜在的には絶えず階級的敵意・人種的憎悪が存在し、それを発揮するチャンスの到来を伺っていたのだ。

人種的偏見についても同じである。人種的偏見を公然と発揮すると政府から法的・社会的に制裁されることを恐れて、表面上は抑制されていたが、依然として植民地主義体制の名残りのレイシズムはボリビアを圧迫していた。MAS ですらも、このレイシズムに対しては、現実政治的(リアルポリティーク)に譲歩的対処をしなければならないときがあった。例えば、平等を促進する機関として非植民地主義化庁を新設したが、その責任者の選出にあたって、それに相応しい人物よりは国民の間の人気がある人物を指名したこともあった。また、軍隊が軍曹や伍長階級を差別する規則を維持することを許可した。軍曹や伍長はほとんど先住民出身者であった。

MAS 政権は、長年権力の座に座っているうちに自然消耗し、失政や欠陥も目立ち始めた。それに対する国民の不満が増加するにつれ、旧権力と旧階級関係の復活を望む勢力が次第に頭をもたげてきた。やがて、「反 MAS」が社会的・人種的シンボルのような位置を占め、低中産階級の人々が「反 MAS」姿勢を「望ましい政治姿勢、社会的向上のための一過程」として内面化する状況も生まれ始めた。

MAS 政権の失政と限界を見てみよう。1)「選挙至上主義」。そのために社会変革闘争を投票場における勝利に縮小してしまい、時には専制主義的手法を使ってでも権力維持を保つ姿勢が生まれた。2)「農民主義」。そのために都市部大衆の要求に対し比較的無関心に

なった。3)「エビスタ」<sup>2</sup>で指導部を固めようとしたこと。4)長く権力の座にいるために官僚主義や汚職がはびこるようになった。5)極端なプラグマティズムと「国家主義的スターリン主義」の間を右往左往し、イデオロギー的に曖昧であった。6)何よりも独裁政権化したこと。

政治的・経済的・統制的に成功したモラレスは、ボリビアで伝統的な独裁者の中の一人となった。社会学者レネ・サバレタが「大衆が指導者を独裁者 (caudillo) に祭り上げる傾向がある」と言ったボリビアで、モラレス政治の中心的重要性と彼のパーソナリティを賛美する国家的カルトの結果、モラレスはかつての大物指導者ビクトル・パス・エステンソーロ<sup>3</sup>やホセ・マリア・リオレス<sup>4</sup>の水準にまで達した。初めのうちはモラレス崇拜者や追従者による部分的祀り上げだったが、やがて彼のカリスマ性、彼の自己陶醉を承認したり利用する力が働き、それに酔ったモラレスも、もし自分に逆らう選挙民が出たら、本来自分の権力の源である人民にも背を向けるほどに増長してしまった。

このため、2019年2月21日、自分の大統領4選を可能にする改憲を提起して国民投票を行って、惨敗した<sup>5</sup>。また、2019年10月20日選挙で、第二ラウンドの決選投票を避けるために開票作業に手を加えたという疑惑を招いて、クーデター及びモラレス亡命となった。(この「不正選挙」に関して、モラレスとMASは否定、いまま法廷で争われている)。

いずれにしても、ボリビア人の選挙への執着心 — ボリビアでは選挙の結果次第で天然資源のレント配分が決まるという、大昔から争われてきた大問題が左右されるので、極めて重要である — よりもモラレスのカリスマ的指導力の方が優れているという思い込みは、大きな誤りであった。その思い込みがMAS支持基盤の社会ブロックを戸惑わせ分解させる結果を招いた。また、この社会ブロックは政権勢力の中に組み入れられ、様々な利権や誘惑に侵されて、すでに弱体化していた。社会的闘争を通じて台頭してきたMASだったが、末期にはその社会的支持層を動員できる力を失くしていた。単なる一選挙マシンに成り下がっていて、なるほど選挙には勝てるかもしれないが、民衆の間に進歩的情熱を巻き起こす力を失っていた。末期のモラレスのために闘ったのは、チャパレの忠実なコカレロ<sup>6</sup>、エル・アルトのアイマラ族が住む先住民地区の住民、彼のおかげで公務員になれた一部の職員だけであった。

モラレスが亡命した後、ラパスではバスや工場やモラレスの敵の家への放火や、亡命先の旧大統領の指令で幾つかの「都市封鎖」が起きて、白人層の伝統的な「インディアンのごろつき」に対する恐怖を呼び起こし、MAS憎悪が集団的ヒステリー次元まで高まった。狂気的な反社会主義談話が燃え上がり、それは現在も拡散されている。

パブロ・エステファノーニはこのときの状況を解説する「三つのキーワード」を紹介している。一つは「群衆」(MAS党員を単なる犯罪的暴徒にするもの)。二つは「浪費」(広く評価されたモラレスのマクロ経済的政策を単なる仮想現実と決めつけるもの)。三つは「暴政」(14年間のモラレス政権を完全な国家専制主義政治とするもの)。この三つの

キーワードは、暫定政府の MAS 弾圧の動機となり、その暴力的弾圧の隠れ蓑に使われた。警察と軍の共同作戦で MAS を支持した団体が徹底的に弾圧され、30人以上が殺害された。ほぼ1000人の指導者が一時身柄拘束された。モラレス大統領はメキシコに、アルバロ・ガルシア・リネラ副大統領はアルゼンチンへ亡命、他の何人かの幹部も国を出た。汚職容疑で取り調べを受けた者は数百人。二人の元大臣が逮捕・投獄された。7人の MAS 幹部はメキシコ大使館に逃げ込んだが、安全に出国できないので大使館の中で立ち往生したまま。

メディアはモラレス亡命を引き起こした抗議を「ピティタ革命」(the revolution of the pititas) と呼んだが、この抗議運動のスポークスパーソン — 本物か自称かは別にして — がボリビアの公的領域を完全に支配した。以前はモラレス政権と繋がっていたか、良好関係を装っていた知識人たちもモラレス批判に転じ、短い語句をつなぎ合わせた意見記事を書いて、サンドバックのようにモラレスを叩いた。大物左派学者は用心深くそういう世間の動向に逆らわないようにし、自らの責任を回避した。アニェス暫定政府は最初からマス・メディアとの関係良好で、メディアをうまく利用してきたが、最近行政力に陰りが見え始めたことを機にメディアへの支配力が減少し始めた。それでも反 MAS という点では暫定政府もメディアも一致している。

こういう状況だから、MAS の余命は幾ばくも無く、やがて辺境の農村地区の小政党に追いやられるものと、誰もが思ったに違いない。しかし、2020年に入ると、既述した逆境にもかかわらず、予定されている国政選挙に関する投票動向のアンケート調査では、MAS がトップに躍り出たのである。それもまだ立候補者が定まっていない段階で。1月の世論調査では、選挙民の21%が候補者未定で選挙綱領も発表していない MAS に投票すると答えた。3月に立候補者が発表されると、国民の33%が支持を表明した。

労働者、一般庶民層、先住諸民族、まだ社会的に上昇移動していないチョロ7は MAS を、MAS がまだ一貫した自己批判をしていないにもかかわらず、自分たちを代表する勢力、国家主権、民族主義、旧権力者が政権に戻れば崩れてしまう人種平等主義を守る唯一の勢力だと見做し続けた。それに、MAS 統治のときにボリビアでは珍しい経済的興隆と政治的安定が伴った。従って、他にも理由があるだろうが、最も過激な「ピティタ」たちの不正選挙容疑を使った MAS 候補者たちから候補資格を剥奪せよという運動が成功しなかったのである。これは直観的常識に反する現象である。多くの悪い点があったにもかかわらず、依然として MAS が政治の中心であり続けたのだ。他の政党や政治勢力は MAS との関係で位置づけされる存在でしかない。昨年11月の不正選挙疑惑で抗議デモが勃発し、政権から追われたにもかかわらず、MAS はボリビア政治の中心軸から外れなかった。これは驚くべき政治的復活例で、すでに述べたように、階級的アイデンティティーと人種的アイデンティティーが同時に表現されるプロセスであった。



## 政権離脱後の MAS

政権崩壊後も MAS が結束を維持しているのは、一つにはエボ・モラレスを崇拜し忠誠を誓う — 必ずしも健康な精神的態度とは言えないが — 「エビスモ」の存在と、また一つには来るべき選挙で勝利するという展望があるためである。政権崩壊は外部勢力の画策（ボリビアの天然資源の支配を狙う帝国主義国の策略とそれに繋がる警察と軍によるクーデター）のためだと思ふ人々は、MAS 支持者の一貫した支持の継続を当たり前だと考えているかもしれない。しかし、それは違ふだろう。すでに述べたように、MAS 崩壊は外部的要因と内部的要因の両方から生じたものであった。それに、MAS は決してイデオロギー的政党ではなかった。それは「労働組合的」(sindicalista) な性格で、MAS の魅力の一部は意識が高く野心がある組織員や中間階級庶民層の人に社会的出世のチャンスを与えることができることだった。だから、早くも MAS の権力復帰が可能という期待が、いっそう MAS 統一と結束を促進したのである。

モラレスは、MAS を構成する各グループにとって唯一のシンボルとして、彼らの結束を固めるうえで大きな役割を果たした。モラレスという存在がなければ、これらのグループは、最近の世論調査で左傾化を示した 33% を超える選挙民に関して、それぞれそれを代表するのは自分たちだとして貼り合うだけであつたらう。モラレスは常にこういう役割を担ってきたのだ。MAS が 20 世紀の左翼の念願であつた「左翼の統一」を実現したとするならば、それは思想的・論理的基盤（イデオロギー的ヘゲモニーの確立、左翼防衛戦線の確立等々）によるものでなく、一人のカリスマ的守護者のもとでの結集という極めてボリビア的なものによるものであつた。モラレスという人物のもとに、MAS を構成する主要 3 派、すべて「エビスタ」で、それぞれ多くの下部集団を抱える 3 派がまとまっているのだ。この構図のおかげで「3 派が政治的道具の中に居座る」ことができ、同時に危険な主導権争いを避けることができたのだ。その 3 派とは；

(a) 「統一協定」(Pacto de Unidad) と呼ばれる労働者と農民が形成する主流派。この派の指導者の一人は、2006~2018 年モラレス政権の外務大臣を務め、現在 MAS の副大統領候補となっているダビッド・チョケワンカ。もう一人はモラレスが今も会長をしているコカレロ労働者組合連合の事実上の指導者である。

(b) 伝統的左翼の様々な活動家グループから成る派。この派では急進的「国家主義的スターリン主義」指導者が目立つが、同時に現在 MAS の大統領候補になっている穏健派で、かつて経済大臣を務めた社会主義者ルイス・アルセもいる。

(c) ネオ・マルクス主義者、ポスト・モダン派、左派ヒューマニスト、進歩的民族主義者から中産階級出身者から成る派。MAS が政権を握る前後に入党した人々で、その教育資源を使って MAS の行政的運営で大きな役割を果たした。一部はチョケワンカと繋がっているが、大部分はガルシア・リネラ（彼のこれからの役割はまだ不明）と繋がっている。

(a) の先住民・労働者派はモラレス政権崩壊をまったく人種的観点から見ている。その感情は、部分的だが、(c) の中産階級出身 MAS 党員に向けられることもある。実際(c)派は他

の二派から売名または財を築くために「先住民政府」へ入ってきた「日和見主義者」だと見られる傾向がある。こういう状況の中で一度モラレスから政府を追い出されたチョケワンカが復活したのである。MAS 政権時代、モラレスが大統領第三期を目指していたとき、チョケワンカ外務大臣がモラレスの跡を継ぐ大統領と人気が高まっていたので、モラレスは彼を閣外へ追い出した。チョケワンカはモラレスに忠実で、農村地区の NGO 等を統括して、若き同志モラレスを農民組合活動家から国政指導者へ上昇する地盤を築いた人物である。MAS 立ち上げの地盤となったアイマラ族地域（ラパストオルロを含む高原地帯）をまとめたのはチョケワンカで、モラレスはもともとアイマラ族出身であるにもかかわらず、ケチュア語諸族が多いコチャバンバ溪谷を地盤としていた。チョケワンカは穏健派の文化的インディアニスタ（先住民族主義者）であるが、その政治的力を MAS 内の先住民と中産階級党员の間の対立を源泉にして得ている。モラレス政権時代は副大臣ガルシア・リネラと暗黙の対立関係にあった。彼は人種的観点から MAS 党内の力関係を見、政権の失敗をすべて副大統領のせいにした。また、自分が閣外へ追い出された事件も副大統領の陰謀と思い、少なくとも表向きにはモラレスを非難しなかった。

外務大臣職を解かれ、自分の息がかかった役人も官庁から追い出された後、チョケワンカは米州ボリバル同盟（ALBA）の事務総長としてベネズエラへ「高級亡命」した。そのチョケワンカを、統一協定は来るべき選挙の MAS 大統領候補に指名し、副大統領にアンドロニコ・ロドリゲスを指名した。MAS はこの二人の候補と他に統一協定が立てた国政選挙立候補者リストを承認した。統一協定は MAS 党内における実力のほどを示したわけだった。しかし、亡命先のモラレスがこれに反対した、彼は自分に近い中産階級出身のルイス・アルセを大統領候補とし、チョケワンカを副大統領候補にするように指示した。アルセにはチョケワンカのような社会的基盤を持たないので、選出されてもモラレスに全面依存して政治を行わなければならないだろう。チョケワンカは、いかにも彼らしく、モラレスの指示を受け入れた。それは表向きの態度であって、当然個人的には不満であったに違いない。彼はこれもガルシア・リネラの策動だと考えたのではなかろうか。いずれにせよ、彼のモラレスへの従順さのおかげで、ブエノスアイレスのモラレスと統一協定の間、MAS にとって致命的となる危険な対立は起きなかった。

とはいえ、「労働者」、「専門職」、農村地区の「MAS 創設者」、都市部の「お客さん」党员、「国家民族主義者」、「 коммуニスト」の間の緊張関係は存在し続け、MAS が選挙に勝とうが負けようが、いつの日か顕在化するであろう。

こういう社会構図の中で浮かび上がったもう一人の MAS 政治家は国会議長のエバ・コパ上院議員である。彼女は先住民の主張を支持し、MAS 議員たちをアルセやモラレスから一定の距離を置いた形で指導した。とはいえ、単純にチョケワンカ支持者の一人と分類することはできない。昨年 11 月のモラレス政権崩壊後、彼女はアニェス暫定政府と合意を結び、国内やブエノスアイレスに亡命した同志たちとは連絡をとらないと約束した。そのうえ、自分の個人的状況が困難になることを承知で、アドリアナ・サルバティエラ上



院議員のような中産階級出身 MAS 指導者を公然と批判した。

モラレスはそれを変質行為として非難しなかった。多くの「カウディーリョ」(独裁的指導者)と同じように、彼は自分の役に立つと思われる人物や団体すべてと良好な関係を保った。こういう彼の態度が議会内の MAS コーカスの解体・離脱を防いでいるのだ — アニェス暫定政府にはそういう姿勢がない。それどころか、MAS コーカスが崩れるかもしれないと心配された危機が過ぎると、MAS 議員たちは力を取り戻し、一部の人々から「民族主義大衆主義ブロック」の反撃と呼ばれた運動を展開した。

こういう MAS の極端な寛容、イデオロギー的無頓着といえる寛容さは、MAS が根っからの選挙至上主義政党であることを物語っている。それが現在の MAS を形成しているのである — 無定形で、どんなことでもすべてを解決する唯一の方法は選挙に勝つことだという考え方に集約される。こういう考え方があるので、昨年11月の敗北の原因を徹底的に議論することもしないし、失敗から学ぼうともしないし、改善・進歩することもしないのだ…たとえ渋々でもモラレスが大統領時代に継続続投を求めたのは間違いであったと認めたら、コロナ・パンデミックへの対応など現在アニェスが直面している統治問題のおかげで、ボリビアでモラレスの位置が少し改善するかもしれないとことを考慮して、考え方を変えているかもしれない。しかし、モラレスは頑として続投を求めたのは間違いではなかったと言い張っている。

### MAS は権力の座に就けるか？それは中期的観点から望ましいことか？

9月選挙で MAS は政権復帰するだろうか。技術的にはイエスだ。勝つためには40%以上の得票が必要だが、世論調査では33~40%の支持があるので、それは不可能ではない。それに、政敵となるメサとアニェスがそれぞれ別個に立候補して競い合っているので、どちらの集票力もせいぜい20%を超えることはない。ただ心配なのは、反 MAS 選挙民がメサかアニェスのどちらかに絞って投票しようという運動を起こす可能性があることだ。実際、2019年10月にそういうことが起きた。かりに第二ラウンドの決選投票になって激しい両極争いとなれば、反 MAS 側が僅差で勝つ可能性がある。

選挙に勝てば MAS は政権に就けるのであろうか。現在に似た状況が昔にもあった。1943~1946年に民族主義的軍将校と組んで国を治めた民族革命運動党(MNR)<sup>8</sup>も、MAS と同じように、旧勢力エリートの憎悪に直面した。1951年の選挙で勝利したにもかかわらず、敗者のマメルト・ウッリオラゴイティアは MNR のパス・エステンソロの勝利を受け容れず、権力を軍事政権に渡した。これは「マメルタソ」としてボリビア歴史に名をとどめている。

新たな「マメルタソ」がボリビア歴史に生じる可能性はあるだろうか。もちろん当時と今では国際状況が大きく異なっている。しかし旧勢力は利用できる限りあらゆる資源と手段を使って、「ボリビアの癌」(ある評論家が MAS と軍の一部をそう呼んだ)の権力復帰に抵抗することは大いにあり得る。当時ウッリオラゴイティアが使った論理は「共産主義

者に国家を渡すわけにはいかない」であった。今日では、「麻薬テロリスト、または不正選挙で国民を騙そうとした犯罪者に国家を渡すわけにはいかない」という論理を使うだろう。その論理を使って MAS 候補者から立候補資格を剥奪するかもしれない。モラレスもそれを「奴らの B 計画」として警告を発した。

ボリビアの民主派セクターは「マメルタソ」再現は過誤の繰り返しになると見るだろう。彼らは、ウッリオラゴイティアの「マメルタソ」の数カ月後に民族革命が勃発し、パス・エステンソーロが亡命先アルゼンチンから帰国して大統領になったことを忘れていない。

面白い（単純な）設問がある。急いで政権復帰することが MAS にとってよいことだろうか、という設問だ。急に政権復帰すれば、自党をきちんと立て直し、過去の傷を癒し、「我らの大統領エボ」ともっと健康な関係を築くのに必要な時間と場が確保できない。つまり、以前と同じ誤りを繰り返さない反省と改善をする余裕がなくなる。しかし、他方では、治安機関から包囲されている党が政権から離脱していると、結局解党か分党するかという没落の道を辿ることもある。「負けるが勝ち」という発想は、モラレス、アルセ、他の指導者、そして裁判中、週間中、亡命中の MAS 党员や支持者の心にはないことは、確かだ。

政権を握ったらアルセとチョケワンカは何をするだろう。2020～2025年の間に何に直面するだろう。少なくとも初めのうちは種々の抵抗に直面することは予測される。治安機関の攻勢や嫌がらせ、経済界、大学、メディアのエリートたちの容赦ない反対キャンペーン、折角蜜の味を味わったのに再び冬営地に戻らなくてはならない中産階層の反対デモ、ねじれ国会、MAS 内部の「報復派」と「調和派」の内部対立、そして何よりもコロナ・パンデミックと経済危機に対処しなければならない。

こういう中で、アルセが政敵の着手した旧体制復旧過程を阻止し、下からの視点で国家運営をできるならば、それだけで幸運だと言えるだろう。彼にそれ以上のことを期待するのは非現実的だろう。いずれにせよ、歴史や物語にあるように、戦争をやると決心した將軍たちは占い師の予言には耳を貸さないものである。

---

## 訳注

<sup>1</sup> モラレス退陣による大統領選挙は2020年5月に予定されていたが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い9月6日まで延期され、その後アニェス暫定政権が10月18日まで延期を提起、それに抗議する混乱が生じている。

<sup>2</sup> モラレスに盲目的に追従する人々。

<sup>3</sup> 1907～2001。社会主義革命の旗手であったが、3度目の大統領時代に豹変し、労働組合潰し、戒厳令、虐殺を行った。

<sup>4</sup> 1808～1861。1857年ボリビアで最初の市民派大統領となったが、終身大統領を求める独裁者となった。

---

<sup>5</sup> 反対 51.31%、賛成 48.69%。

<sup>6</sup> 伝統的にココの実を栽培する先住民農民で、モラレスもコカレロとして働いたことがある。

<sup>7</sup> cholos, cholas。ボリビア、チリ、ペルーではインディオやインディオとの混血を指し、米国ではメキシコ系米国人を指す侮蔑語。

<sup>8</sup> 民族主義的ポピュリスト政党であったが、1982年に民政復帰してからは、新自由主義に基づく親米政治を行うようになった。